

不登校親支援の有用性の実証
—わが子の事例と他家族の事例からの考察—

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
森 康博

不登校は、「どの子にも起こりうる」と言われながらも、最愛のわが子が、突然、不登校に陥った時の衝撃は計り知れず、何とか学校に復帰させようとすればするほど、子どもの状態は悪化する中で、親は、子育てに対する自責や子どもの将来に対する絶望感に襲われる。筆者自身もわが子の不登校を経験し、その中で不登校親の会（以下「親の会」）との出会いにより、臨床心理士や不登校親 OB（以下「親 OB」）らの支援を受けながら、わが子を社会復帰させることが出来た。特に、親 OB による体験談を交えた支援は、わが子の姿と重なり非常に勇気づけられ、親 OB による支援の必要性を実感した。そこで、先行研究を探してみたが、親の会の中での親 OB について触れた記述はあるものの、親 OB による親支援を直接扱った文献を見つけることは出来なかった。現在、筆者は自分の体験を基に、親 OB の立場から、不登校の子を持つ親御さんに対する支援活動を行っている。この支援は、筆者自らの体験に基づくもので、そこには「自らわが子を回復させた」という裏付けがある。この裏付けとなるのが、筆者が作成した「わが子の不登校史」であり、これを辿りながら、どの様な過程を経て回復に至っているかを明らかにし、それが実際、他の家族でも同様な形で回復に至っているかどうかを検証し、それを支援モデルとするために、その有用性を実証するのが、この研究の目的である。

筆者は、上記不登校史を整理・分析した結果、回復に至る過程を「不登校前」「不登校の頃（不安定期・安定期）」「好転のきっかけ」「好転の経緯」の4つに区分することが出来た。

この区分の内、「不登校前」を除き、全ての区分において、親 OB のアドバイスに基づく「登校刺激を掛けずに自由にさせる」という対応や、その時々ポジティブな支援、そして社会資源の活用が、わが子を安定へと導き、その後の回復に繋がっていることが明らかになった。筆者は、この結果を裏付けるため親の会関係者を中心に（1人については心療内科医師の支援）他家族の場合もこれに当てはまるかどうかを不登校の子6人の5家族7人（内夫婦2組4人）から半構造的なインタビュー調査を行い、その結果、学習障害があるとされる1人を除き5人が、筆者の事例にほぼ当てはまることが確認できた。筆者の支援モデルが、発達障害などを抱える子どもの場合には必ずしも当てはまらないことが判明し、今後の課題として残されたが、心因性の不登校の子等の場合には有効ではないかと考察した。